九　コンビ復活

「どうも。いたよです」
「いないよです。それにしても、人形が人間より先にしゃべるか」
「人形じゃないよ。あたしはいたよよ。れっきとした人間よ。ここにいたよ、なんて」
「ほら、早くもおばんギャグやね」
「何しろ、久しぶりに舞台に立つから、緊張するわ」
「人形のあんたでも、緊張するんかいな」
「そやから、人形やないと言うてるやろ。あたしはいたよや。ちゃんと、体を動かしてよ。人形なんやから自分で動けんのや」
「自分で人形やて言うてるで」
「ほっといて。それにしても、秋になりましたな」
「そうですね。秋や言うたら、コスモスですねん。コスモスや言うたら、ピンクやなあ」
「それで、いないよちゃん、あんた、全身、ピンクのカーテンを体に巻きつけとんかいな」
「どこがカーテンや。ドレスや。ドレス。高級ドレスや」
「何が高級や。ほんまに、それ、ドレスかいな。どれす、どれす？」
「汚れた手で触らんといてえなあ。これは貸衣装や。舞台が終わったら返さなあかんのや。それに、どれす、どれす、って洒落かいな。しょうもないなあ。高級ドレスに合わせて、もっと高級な洒落言うてえなあ」
「あっはっはっは。ごめん、ごめん。ドレス着てる人に合わせて低級な洒落を言うてしもうたわ」
「相変わらず、癪に障るなあ」
「ほんで、いないよちゃんはコスモスの花を見に行ったんかいな」
「行った。行った。家の近所の公園にぎょうさん、コスモスの花が咲いとって、花見客がコスモスに負けんくらいお酒飲んでピンクの顔しとったわ。どっちがコスモスかわからんかったわ」
「いないよちゃんもお酒飲んだんかいな」
「ちょっとね。たしなむ程度や」
「お客さん。ちょっと聞いて。この人なあ。ものすごくお酒飲むんやで。この体見てやってえたあ。お腹つついたら、おへそからビールが出てくるんやで」
「あたしは人間樽酒か。急に、お客さんに話を振らんといて。お客さんもびっくりするやろ」
「何、言うてんねん。最近は、イベントでも何でもお客さんの参加型が流行っとんのや」
「人形の世界もか？」
「人形やない。あたしは人間や。お笑いも、舞台に立っとる二人だけでするんやないで。お客さんも参加してもらわなあかん。その方が、お客さんも楽しいやろ。なあ」
「なあ、やないで。いたよちゃん。お客さんに無理強いしたらあかんで」
「なんか、お客さんと一緒になってしゃべったら楽しいなあ」

「そりゃ、一人より二人、二人より三人、三人より四人の方が、おしゃべりは楽しいわ」
「ほな、これからもよろしく」
「こっちもよろしく」
「お客さんもよろしく」
「よろしく」

いないよといたよ人形は舞台の下手に引いた。観客の拍手が鳴り響いている。
「お疲れ様です」「お疲れ様」「お疲れ様です」「お疲れ様」
舞台関係者とあいさつを交わすいないよといたよ。そのまま控室に向かう。
「お疲れ様」
控室ではマネージャーが待っていた。
「お疲れ様」「お疲れ様」
いないよといたよが返事をする。
「もう、腹話術はいいのよ」
マネージャーが微笑む。
いないよといたよ人形は互いに顔を見つめ合う。
「二人は」
「一身同体」
「仕事も」
「私生活もないわ」
二人でマネージャーに微笑み返す。
「そう。それもいいかもね」
マネージャーは無理強いをしない。あれほど落ち込んでいないよが今はこうして元気を取り戻して、舞台に立っている。信じられないことだ。いないよは何かを得たのだろう。そう、いたよという人形を得たのだ。少しくらい変わったことをしても許せる。もちろん、このお笑いの世界は、普通の世界とは異なる。人と変わっていることが普通なのだ。だから、舞台が終わった後も、いないよがいたよ人形と会話をしても普通のことなのだ。
ただし、このお笑いの世界も、舞台では可笑しなことをしたり言ったりしても、日常生活では真面目にしている人が多い。以前は、破天荒な人も多かったが、今は、その破天荒な行動、反社会的な行動を芸人だからと言って社会が許さない。逆に、厳しい。必然的に、お笑いの世界の人間は、お笑い世界を終えると、一般の人以上に襟をただし、普通の人の見本として生活をしなければならない。でも、いないよがいたよ人形と腹話術の会話をするくらいなら、他人に迷惑をかけるわけではない。認めよう。いないよといたよのために。
「じゃあ。帰るで」
「帰るで」
着替えを終えたいないよといたよ人形が控室から出た。
「お疲れ様」「また、明日も」マネージャーはその後姿を目を細めながら見送った。

「やっぱ。みんな。腹話術と思うて、あたしのこと全然気がつかんなあ。いないよちゃん」
「そうや。これも、いたよちゃんのおかげや。これからも頼むで」
「・・・・」
「どうしたんや。急に黙ってしもうて」
「いいや。なんでもない。ちょっとしゃべり疲れたんやろ」
「いたよちゃんでも、しゃべりに疲れるんことあるんかいな」
「そりゃ、あるわ。舞台ではしゃべるけれど、家では無口やで」
「六つの口の間違いとちゃうか」
「六つも口があったら、体がもたへんわ」
「いっぺんにしゃべらんでも、ひとつずつしゃべって、疲れたら、別の口がしゃべったらええん。野球のピッチャーやないけど、ローテンションしたらええんや」
「ローテンションか。それおもろいな。ネタに使えるかいな。ほんでも、一週間は七日やで。ひとつ足らんで」
「日曜日もあったらええやろ。祝日もあったら、十分休めるで」
「ほなら、いたないよちゃんに六つの口があったら、毎日、違う口でごはんを食べるんかいな」
「毎日、口を変えるんやないで。一回の食事で口を変えるんや。例えば朝食やったら、一つ目の口でご飯食べて、二つ目の口で刺身を食べて、三目の口でシュークリーム食べて、四つ目の口で・・・」
「もうええわ。口は六つでも胃は一つやで。それぞれの口で同時に食べたらお腹がパンパンになるやろ。ほんま、あんたは食べてばっかりやなあ」
　二人なら普段の会話もお笑いとなる。まだまだお笑いが続く。
「ほっといてえなあ。お笑いは体力やで。食べな体がもたんやろ。それこそ、いたよちゃんも、もっと食べたらよかったのに」
「あたしがガリガリで、いないよちゃんがデブデブで、対照的な二人やからお笑いが成り立ったんや」
「それはそうやけど。じゃあ、いたよちゃんは、食べたかったのに、食べられんかったんやろ」
「いないよちゃんこそ、食べとうなかったのに、無理して、自分勝手な大食い選手権をしとったんやろ」
「なんで、知っとん」
「知っとるわ。中学生、高校生からのバッテリーやで。あ、うんの呼吸や」
　そうだ。いたよとは中学から、ピッチャーとキャッチャーのコンビだった。本当は、小学生の時からいたよのことは知っていた。すごいピッチャーがいると有名だった。いたよは忘れているかもしれないが、あたしのチームと対戦したことがあった。その時、あたしだけでなくチームメートのほとんどが三振で、五回コールドで大敗した。練習試合だったけど、空振りをする練習にしかならなかった。それ以来、いたよのチームから練習試合の申し込みもなかったし、あたしのチームも恐れ多くていたよのチームに練習試合を申し込むことはなかった。大会では、もちろん、

いたよのチームは優勝し、あたしのチームは一回戦負けか、二回戦負けかなので、いたよのチームと対戦することはなかった。
　このピッチャーと一緒にやりたい。そして、できるだけ一緒にやりたい。あたしはいたよが入学する中学校の近くに引越した。そして、同じソフトボール部に入院した。あたしは内野手だったが、キャッチャーを志望した。キャッチャーをやりたい人はいなかったからだ。それにキャッチャーならばピッチャーのいたよといつも一緒にいれる。そんな動機だった。
　いたよは中学一年生からエースだった。でも、キャッチャーには先輩がいたので、あたしは三年生になるまで、正捕手にはなれなかった。三年生になって、ようやくいたよのボールを受けることができた。あの頃、いたよは体を作るために大食いだった。でも、ハードな練習で太ることはなかった。いつもやせていた。あたしはいたよがどんなボールを投げても、後ろには逃さず捕ろうと思った。また、いたよが少しでも投げやすいように、大きな的になろうと思った。食べて、食べて、食べまくった。吐いても、吐いても、食べ続けた。そして、今の体の原型ができた。

　そう。あ、うんの呼吸だ。どちらが、あ、で、どちらが、うん、なのかはわからない。でも、それはどちらでもいいことだ。あたしが、あ、のときは、いないよが、うん。いないよが、あ、の時は、あたしが、うん、なのだ。あの頃、いないよはやせていた。いないよは、小学生まで内野手だと言ってたのに、中学に入るとやったこともないキャッチャーを志望した。同じ学年でキャッチャーになりたい人はいなかった。だから、いないよはキャッチャーのポジションとなった。でも、キャッチャーには先輩がいた。
　あたしはその先輩とバッテリーを組んだ。でも、練習の時は、できるだけいないよとキャッチボールをした。いないよは、どんどん体が横に大きくなった。あたしが暴投しても、ジャンプして取ってくれた。ワンバンになると、お腹や膝、時には、キャッチャーマスク越しだが、顔面でボールを止めてくれたこともあった。文字通り、体を張ってくれたのだ。先輩が卒業し、三年生になって、いないよとようやくバッテリーを組めた。その時、いないよは大きな壁になっていた。その壁は縦にでも横にでも伸びた。どこに投げても大丈夫だ。どこか一点にしか投げなければならないと緊張して暴投になるが、どこにでも投げていいとなると、面白いように、外角低めや、内角胸元など、思い通りのコースに投げることができた。
　いないよはサインを出さなかった。下手にサインを出すと相手に感づかれてしまうからだ。だから、あたしはあたしの思う通りに投げた。そのボールをいたよはどんなことしても捕ってくれた。でも、キャッチャーとしては、次にどんなコースで投げてくるかが判った方が捕りやすいだろう。あたしに変なプレッシャーかけまいと、あたしが自由に投げられるように、サインを出さなかったのだ。全てあたしのために。いないよ、あの頃、本当にありがとう。でも、あたしは、いないよに一体何ができたのだろう。

　深夜。ベッドでは、いないよがゴーゴーといびきをかいて眠っていた。傍らには、いたよ人形。小さな人形に大きな体のいないよが抱きついている。まるで、母に抱きつく子どもだ。人形の眼が開いた。

　もうだめだ。体が、髪が引っ張られる。なんとか、この人形にしがみついているけれど、もう限界だ。後ろ髪を引かれて、この世にとどまっていたけれど、今度は、反対に、あの世から前髪を引っ張られている。いないよが元気になればなるほど、この世にとどまる力がなくなってくる。もう、お別れなのか、いないよとは。
　いたよはいないよの顔を見る。いびきだけでない。よだれも垂らしている。安心の真っ盛りだ。もう、この顔も見えないのか。いたよ人形は目を瞑った。